戦局の見通し

一九四五年七月二六日に発せられたポツダム宣言については、「一方ではぼくは戦争中にしばしば、オレは十八世紀に生れるべき人間じゃなかったのか、という観念に悩んだほど、自由、平等といった抽象的概念に深く心をつき動かされる性質でした。（中略）ポツダム宣言の全文をはじめて見た時「言論、出版、集会の自由」とくに「基本的人権の尊重は確立さるべし」という言葉（中略）それを見た瞬間、からだ中がジーンと熱くなった」と回想している。そして次のようにもいう。

つまり今日よく人から、敗けるとは思ったけれど、敗けたあとのイメージが浮ばなかったという話を聞きますが、ぼくはちょっとその点逆で、敗けたあとの日本については大体の見当はついていたが、敗けるまでどういう具体的道程をたどるかはまるで混沌としていたんです。それに大体の見透しがハズレなかったといったところで、べつに何の抵抗をしたわけじゃないし、それどころか、一種の二重人格みたいな生活をしていたんですから、今思い出しても自分の姿はみじめなものです。ああいうメカニズムの中で、自分のなかにある浅ましいもの、いやらしいものをいろんな形でマザマザと実感したことが、マア、しいていえばいい体験だったということになるのでしょうね（「戦争と同時代」『座談』②）。

丸山は、情報班が毎週一回ガリ版刷で出している『船舶情報』執筆の「下働き」をやっていた。しかし「書いている最中でも何でも「使役」って声がかかれば、すぐ飛んでいかなければならない」。使役とは肥たごを担いだり、壕を掘る作業だったりであった。「それでも朝鮮の時代に比べたら肉体的には実に楽だった」（「戦争と同時代」『座談』②）。情報班は「一応デスクワーク」であり、「朝鮮の教育召集のときに比べたら、問題にならないほど楽だったです」と繰り返し語っている。そして六月にはようやく一等兵となった（「二十四年目に語る被爆体験」一九六九年八月『話文集』①）。

そんななかで七月末ごろ、参謀長から、情報班長の中尉をとおしてソビエトの今後の態度について一両日中に書くことを命じられた。参考書もないなか無茶な話ではあったが、情報班に転属早々、庶務大尉から「とにかくお前のようなインテリは自由主義を清算していないから十分注意しろ」と頭ごなしにいわれてくさったという経験もあったため、よけいに参謀長の計らいがうれしかったと語っている（「戦争と同時代」『座談』②）。丸山は、大学卒の兵隊に対する周囲の兵士たちの態度について、「表立っては軽蔑するが、内心は畏怖を感じる」「いじめながら、しかも一方では絶えず劣敗意識を感じている」という「二重の態度」があったと指摘している（「日本の思想における軍隊の役割」『座談』①）。

丸山は、ソビエトの対日外交をロシア革命直後から現時点まで五つぐらいの段階に分けて説明した。船舶司令部では日本海輸送を担当していることからソ連の動向には関心が強く、それだけに米英との対立を強調する「希望的観測」が支配的であったが、丸山の出した結論はそれに否定的なものであった。すなわちソビエトは、独ソ不可侵条約で中断されていた国際的人民戦線の考え方が復活し、「大東亜戦争開始」の日に日本は負けるとの見通しを示している。したがって、米英との協調も枢軸国を打倒するまで崩れないであろう、今すぐ宣戦にはいたらないが、日本の戦力が低下したと判断されればソ連が満州に大軍を南下させることはありうる、というものであった。それからまもなく原爆が投

下され、ソ連が参戦した。「結果から言うと半分当って半分はずれた」のであり、情報班長からは「学問というのはエライもんだナ！」と褒められたという（「戦争と同時代」『座談』②）。

「傍観者」としての原爆体験

八月六日、広島に原爆が投下されたとき、丸山は爆心地から四キロ南にある宇品町の船舶司令部の塔の前に集合して参謀の話を聞いていた。その瞬間、参謀の帽子は飛び、まもなく、服がボロボロになり傷を負った宇品の市民が司令部に逃げてきた。船舶司令部は、高い塔がさえぎってくれたために原爆の被害を小さくしたのであった（「二十世紀最大のパラドックス」一九六五年一〇月『集』⑨）。丸山は九日*には外出し、宇品町でも死傷者が多いのに驚いた。また酒井四郎中尉に率いられて、報道班員とともに爆心中心地を一日中歩き回り、「相当放射能を浴び」た（「二十四年目に語る被爆体験」『話文集』①）。

*「二十世紀最大のパラドックス」には「翌々日」とあるが、「二十四年目に語る被爆体験」（『話文集』①）では九日であることが確認されている。

しかし、丸山は長らく公的な場でこの体験を語ることなく、後述するように（→第六章）はじめてそのことに触れたのは、一九六五年八月一五日、九段会館で行われた八・一五記念国民集会の聴衆席からの発言であった（「二十世紀最大のパラドックス」『集』⑨）。

重臣リベラリズムへの期待と「国体」の両義性——敗戦を迎えて——

次章で述べるように、敗戦から「超国家主義の論理と心理」を書く半年ぐらいまでの間が重臣リベラリズムの克服過程だったという（『回顧談』（上）三二六）。丸山は、日本の敗戦が近づくなか、その日の到来に期待をかけていた。丸山の記憶によれば、重臣リベラリズムという呼称は当時はあまりなく、通常「親英米派」と言われており、「新英米派というのは、大ざっぱに言えば、国内的に立憲君主制、国際的には国際協調主義です。これを平和主義とか反戦とか言うと、ちょっと違う。反戦とは言わないのが、当時の自由主義者です。国際協調主義の結果として、なるべく戦争をしないほうがいいということになりますけれども、反戦と言うと言い過ぎになる。（中略）そういう考え方が、天皇を囲む重臣のすべてではないのですけれども、主な人々の立場なのです」ということになる。近衛文麿はそれとは異なっており、中心は「なんといっても西園寺公望、それから湯浅倉平」であった（『回顧談』（上）三三一）。

父幹治も同じく親英米派でその人たちとの人的つながりもあり、なかでも最も親しかったのが牧野伸顕であった。そして父も丸山も、ともに国体否定ではなかったが、「国体と国体論は区別しなければいけない。国体論に対する反感はあったけれど、それは国体の否定にまでは決していかない」という点においても共通していた（『回顧談』（上）三三三、三四八）。

国体と国体論を区別するという丸山の姿勢は、「国体」の持つ両義性の追究につながっていき（『回顧談』（上）三四四）、丸山はその点を、敗戦をめぐる船舶司令部参謀部の将校たちの反応を目の当た

評伝 丸山眞男

その思想と生涯

黒川みどり

有志舎

最後になったが、『評伝 竹内好』（二〇二〇年、有志舎）の共著者であり一二年間私の同僚でもあった山田智氏は、私の伝えたいことを最もよく理解し、その上で率直に批判もしてくださるかけがえのない存在である。先にも述べたように丸山を理解し評価する人が歴史学にも部落問題の研究者にも皆無に近いなかにあって、私は氏に自分の考えをぶつけ氏の意見を聞かせていただくことで、ともかくもここまでたどり着くことができた。山田氏の存在があってこそ今の私の研究があると思っている。丸山が竹内好を〝親友〟と称したように、私にとっての山田氏にはその言葉がふさわしい。丸山彰氏の御宅で写真をスキャンしていただいたのに加えて、丸山の著作などの撮影も含めてすべて本書の写真の手筈を整えてくださったのは、ほかならぬ山田氏である。

ほかにも、個々にはお名前をあげないが、多くの方々のお世話になっている。以上の方々に心よりお礼を申し上げる。

二〇二三年九月二〇日

黒川みどり

著者紹介
黒川みどり（くろかわ　みどり）
早稲田大学第一文学部日本史学専攻卒業、早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学　博士（文学）
現在、静岡大学名誉教授
主要著書：『共同性の復権』（信山社、2000年）、『描かれた被差別部落』（岩波書店、2011年）、『差別の日本近現代史』（共著、岩波書店、2015年）、『創られた「人種」』（有志舎、2016年）、『評伝 竹内好』（共著、有志舎、2020年）、『被差別部落認識の歴史』（岩波現代文庫、2021年）、『増補　近代部落史』（平凡社ライブラリー、2023年）、『被差別部落に生まれて』（岩波書店、2023年）

評伝　丸山眞男――その思想と生涯――
2024年3月10日　第1刷発行
2024年6月20日　第2刷発行

著　者　黒川みどり
発行者　永滝　稔
発行所　有限会社　有　志　舎
〒166-0003　東京都杉並区高円寺南4-19-2
クラブハウスビル1階
電話　03(5929)7350　FAX　03(5929)7352
DTP　言海書房
装　幀　折原カズヒロ
印　刷　モリモト印刷株式会社
製　本　モリモト印刷株式会社

© Midori Kurokawa, 2024.　Printed in Japan.
ISBN978-4-908672-72-9